

## 演説における機能的談話分析

### —トランプとバイデンの大統領就任演説を通して—

進藤三雄

#### 1 はじめに

スピーチという言語行為は、比較的公的な場において、複数の聴衆を相手に自分の考えをわかりやすく伝える行為であり、ことばだけを取り出せば一方向の「独話」に分類される発話形式であるが、話し手は一方的に自分のペースで話を進めるだけでなく、自分の話し方をモニターしつつ聞き手の反応を窺い、聞き手の反応に応じて話のペース、時には話の内容の軌道修正を行ったりもする。聞き手がたとえ一言も発しなかったとしても、話し手は聞き手の表情や態度から何かを理解・判断するし、聞き手も受け身一方で何もしないのではなく、間接的に話し手の話の展開に影響を及ぼし続ける。このことから、スピーチは、ことば以外の相手の反応も合わせた「相互コミュニケーション」であるといえる（加藤 2001; 土岐 2001）。

本研究は、アメリカの共和党トランプ大統領<sup>(1)</sup>と民主党バイデン大統領<sup>(2)</sup>の就任演説を取り上げ、Systemic Functional Linguistics 選択体系機能言語学（SFL）と、その中のアプレイザル理論の枠組みを中心に談話分析をする。この研究の目的は、二人の大統領の演説で使われているテキストを分析することで、共通する言語的特徴とそれぞれの特異性を指摘し、各大統領がどのような談話ステラテジーで大勢の聴衆に自分の「声」を届けようとしているのか探ることにある。そしてその結果から、日本におけるスピーチ能力向上に向けた教育にとって、何らかの参考になる視点を見つけることにある。

#### 2 背景

##### 2-1 日本におけるスピーチ教育

明治時代の初め、英語の「スピーチ」を「演説」と訳し、西洋流の演説を日本に導入し、広めたのは福沢諭吉であると言われている（佐々木 2001）。彼は西洋の演説や討論を成立させている精神、すなわち、パブリック・コミュニケーションを日本に発達させようとしたのであるが、その目的が現在まで十分達成できたとは必ずしも言えない。その原因として中村（2001）は、戦前同様、日本の国語科教育が文字言語理解の教育に偏っていて、スピーチの教育が全国的レベルで積極的に取り組まれてこなかった点を指摘している。

一方アメリカの学校教育では授業でスピーチが頻繁に課される。生徒はスピーチの原稿作りに

追われると同時に、ジョークを交えるなど、いかに聞いている者を引きつけ、自分の言いたいことを人に訴えるかということに主眼を置きながら予行演習も入念に行う。アメリカ人のスピーチがメリハリが効いていて、ユーモアがあり、人を引き付けるのは、授業で訓練を受けているからである（石角 2000）。

## 2-2 アメリカ大統領選挙

2016年の大統領選挙で共和党のトランプが当選した背景を、会田（2020）は次のように指摘している。トランプ陣営は自由貿易と対外軍事介入を否定し、一方で「大きな政府」によって社会保障の維持を約束する、まさにレーガン主義を反転させた選挙公約を打ち出した。こうしたポピュリズムともいえる公約は特に高校卒業以下の低学歴の白人男性を引きつけ、この層においては民主党のヒラリー・クリントンに対して実に38ポイントもの支持率の差となった。これが中西部の「ラストベルト(錆び付いた工業地帯)」などの接戦州をトランプが僅差で制する力となった。

一方、2021年に大統領に就任したバイデンは、上院議員を36年、副大統領を8年務めた経験を持ち、典型的な政治的エスタブリッシュメントであり、そこに目新しさはないものの、民主党の大統領候補者としては36年ぶりにアイビーリーグの学位を持たない候補でもある。大統領候補としてのバイデンには、その凡庸さへの批判が常につきまどってきたが、まさにその凡庸さゆえに、非エリートにも共感を広げうることに、彼の強みがあるといえるのかもしれない（三牧 2020）。

## 3 語彙分析

### 3-1 語彙密度と発話速度

各大統領の演説で使われた語彙数と要した時間は表1の通りである。演説時間の長さにも関係するが、バイデンの全語彙数はトランプの語彙数の1.71倍であった。語彙密度は、名詞、動詞、副詞、形容詞などの内容語の数を全語彙数で割ったものであるが（Eggins 1994）、両者には大きな違いは見られなかった。

表1 スピーチにおける語彙数と演説時間

	全語彙数	内容語数	語彙密度	演説時間	スピーチ速度
トランプ	1458	755	51.8%	16分20秒	89.3
バイデン	2495	1267	50.8%	21分17秒	117.2

スピーチ速度は全語彙数を演説時間で割ったもので、1分あたりの語彙数を表している。アメリカ人の平均的な話す速度は1分間に約125語（Harvard Business Review 2002）という調査結果を考えると、演説という場では普段の会話よりゆっくり話される傾向にあることがわかる。特にトランプは、映像で確認しても一語一語明確な発音で話し、聴衆からの拍手に対しても十分な間を取りながら、かなり遅いスピードで発話している姿勢が見える。

### 3-2 特徴的語彙

次に二人が演説の中でどのような語彙を積極的に選んで使用しているか見てみたい。図1はトランプとバイデンが演説中で使った語の中で、特に名詞と動詞に限って差異が顕著である語を対応分析したものである。

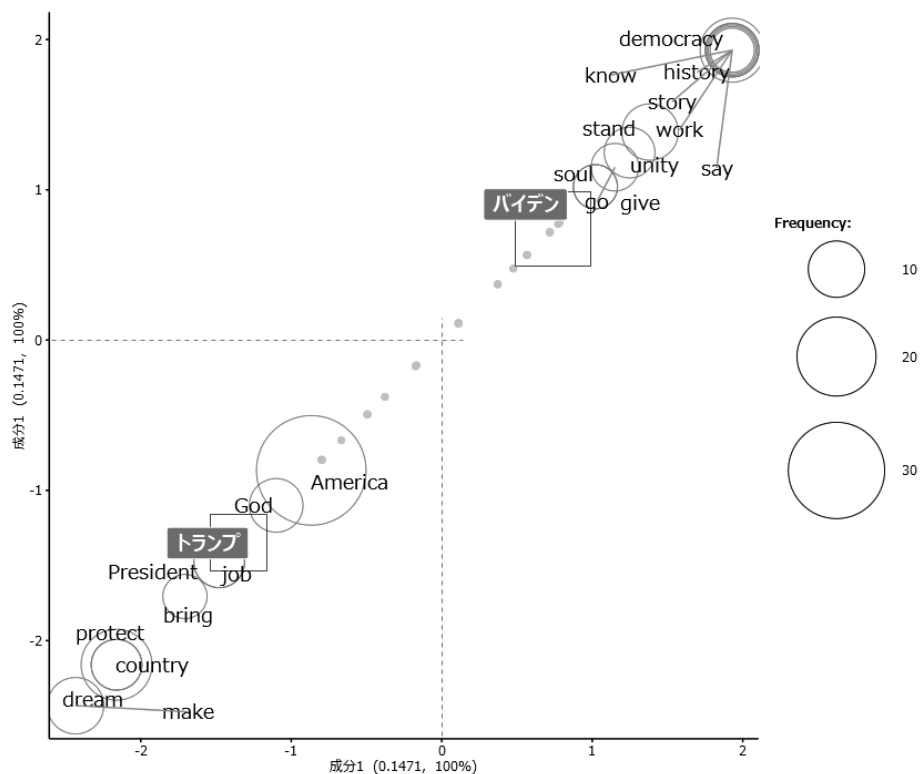


図1 トランプとバイデンの特徴語彙 (名詞+動詞)

図1から、トランプの演説では *America/job/ country* のような名詞や、*protect/bring* のような動詞が特徴的な語であると読み取れる。これらの語彙は原点から見てトランプの方向にあり、さらに原点から遠くに離れているので、トランプの演説に特徴的だったとわかる。次にいくつか例を示す (以下、下線部は筆者による)。

- We must protect our borders from the ravages of other countries making our products, stealing our companies, and destroying our jobs.
- We will bring back our jobs. We will bring back our borders. We will bring back our wealth. And we will bring back our dreams.
- We 've made other countries rich while the wealth, strength, and confidence of our country has dissipated over the horizon.

- Together, we will make America strong again. We will make America wealthy again. We will make America proud again. We will make America safe again. And, yes, together, we will make America great again.

この例文に見られるように、*country* は米国を示す場合だけでなく、アメリカがこれまで他国 *other countries* の犠牲になってきたことを訴えるために何度か使われている。トランプは、自国の雇用や自信を他国から取り戻し、国境を守らなくてはならないことを、動詞 *bring back* や *protect* を使いながら主張している。最後の例は演説の終盤に現れたものであるが、そこではトランプが標榜している「アメリカ第一主義」を主張するために、*America* という語が連呼されており、アメリカの力を再び取り戻そうとする彼のメッセージが同じ文型表現を使いながら繰り返し強調されている。以上のような語彙が多用されているのは、トランプの保護主義、アメリカ第一主義の考えの表れであると言える。

一方バイデンの演説では、*democracy/ unity/ history* などの名詞や、*say/ know* といった動詞が原点から見てバイデンの方向にあり、さらに原点から遠くに離れていることから、バイデンの演説に特徴的な語彙だったことがわかる。*Democracy* に関して調べたところ、バイデンが演説中に 12 回使用しているのに対して、トランプは 1 度も使用していなかった。また、*unity* では、バイデンが 8 回使用しているのに対してトランプは 1 度だけの使用だった。さらに *history* に関しても、バイデンの 11 回の使用に対して、トランプは 1 度だけの使用にとどまっていた。次にいくつか例を示す。

- We've learned again that democracy is precious, democracy is fragile and, at this hour my friends, democracy has prevailed.
- My whole soul is in this. Bringing America together, uniting our people, uniting our nation. And I ask every American to join me in this cause. Uniting to fight the foes we face - anger, resentment and hatred, extremism, lawlessness, violence, disease, joblessness, and hopelessness.
- History, faith and reason show the way. The way of unity. We can see each other not as adversaries but as neighbors. We can treat each other with dignity and respect.

最初の例は、数日前にトランプ支持者が議事堂に乱入した事件を念頭に置いた発言と思われ、*democracy* の重要性を再確認するものと捉えることができる。その上で、2 番目の例で彼は、アメリカの国民が党派を超えて結束し、社会を分断する様々な問題に立ち向かっていく必要性を訴えている。最後の例では、信頼や理性と共に、アメリカの歴史 *history* を振り返ることが連帯への道を実現するために重要であることが述べられている。彼はまた、この演説の他の部分でも何度か歴史的人物や出来事を取り上げながら、過去にアメリカが危機に瀕したときにも、その都度、国

民が結束して困難を乗り越えてきたことを訴えている。バイデンがこのような語彙を多用しているのは、彼がアメリカ社会の分断を危惧する中で、国民の「結束」の必要性と、民主主義に基づく「法と秩序」を取り戻そうとしている表れだといえる。

## 4 主題分析

### 4-1 主題とは

次に各大統領の就任演説における主題の取り方について分析をおこなう。主題 (Theme) とは、既知のまたは少なくともそのコンテキストから読み取れる情報で、メッセージの起点としての役割を果たす要素であり、その節が語ろうとするものである。また、主題に続く題述 (Rheme) は、主題を展開するもので、伝えるべき新情報を含んでおり、当事者達の知識を豊かにする情報である。節は基本的に主題と題述の順で構成され、英語の文法においては、主題は節の最初の位置に置かれる。主題構造を節ごとに分析することによって、我々はそのテキストの構成の仕方を理解し、話し手が我々に示そうとしている関心事がなんであるのかを理解できるようになる (Halliday 1994; メーナード 2004)。

主題構造は、テキスト形成的 (textual)、対人的 (interpersonal)、話題的 (topical) 主題の3種類の主題によって形成される。テキスト形成的主題とは、テキストの他の部分に特定の節の意味を関連させる機能を持つもので、主に接続詞や *on the other hand* のような接続付加詞などがこれに相当する。対人的主題は、聞き手や命題に関する話し手の判断や態度を表出する機能を持ち、呼び掛け語 (vocative) や *unfortunately* のようなモーダル付加詞などを含む。話題的主题は節の経験的意味に関する方向性を表す機能で、人や物事を含む参与要素や、状況要素がこれに相当する。例えば図2の例のように、節の主題構造においては、話題的主题は必須であり、それに先行するテキスト形成的主題と対人的主題はオプションである。このような多重主題 (multiple theme) は、テキスト形成的主題^対人的主題^話題的主题の順で現れる (龍城 2005)。

and,	most importantly,	we	will be protected by God.
textual	interpersonal	topical	
Theme			Rheme
そして何よりも大切なことは、私たちは神に守られているのです。(トランプ)			

図2 多重主題

話題的主题に関しては、図2の *we* のように、人物や物事を含む参与要素が主題となる場合が無標の主題 (unmarked theme) と言えるが、状況要素なども情報の流れや強調などの理由から文頭に出現することがあり、その場合は有標の主題 (marked theme) と呼ばれる。図3の例では、参与要素 *we* の前に状況要素である *in the work ahead of us* が有標の主題として出現し、議論の枠組みが設定されている。

	My fellow Americans,	in the work ahead of us	we're going to need each other.
textual	interpersonal	topical (marked)	
Theme			Rheme
同胞のアメリカ人の皆さん、これからの作業において、私たちはお互いを必要とします。(バイデン)			

図3 有標の主題

## 4-2 主題分析結果

表2は、トランプとバイデンの演説における主題の分布を示したものである。この分析結果から、テキスト形成的主題、話題的主題に関して両大統領の主題の選び方に大きな違いは見られなかった。しかし、対人的主題に関しては、トランプの使用頻度が1.9%だったのに対し、バイデンの使用頻度は8.1%であり、検定の結果、有意な違いが認められた( $\chi^2(3) = 10.23, p < .05$ )。

表2 大統領と多重主題 のクロス表

		Textual	Inter-personal	Marked Topical	Unmarked Topical	計
トランプ	度数	53	4	19	139	215
	%	24.7%	1.9%	8.8%	64.7%	100.0%
バイデン	度数	77	30	29	236	372
	%	20.7%	8.1%	7.8%	63.4%	100.0%
計	度数	130	34	48	375	587
	%	22.1%	5.8%	8.2%	63.9%	100.0%

バイデンが対人的主題を使っている場面は例えば、次の2つの発言に見られる。この例では、バイデンは聴衆に向かって呼び掛け語を積極的に使用している。呼び掛け語は、法構造に影響を及ぼすものでもなく、また残部の意味に貢献するものでもないが、これらの要素は発信者と受信者の対人関係的特性を合図する上で重要である。この2つの例では、*Folks*や*Look folks, all my colleagues...*を文頭に使うことで、バイデンは聴衆との心理的距離を縮め、同志としての関係を共有し、今後の行動への協力を促すメッセージが発信されているといえる。

- Folks, it's a time of testing.
- Look folks, all my colleagues I serve with in the House and the Senate up here, we all understand the world is watching.

またバイデンは疑問節を演説の中に取り込んで聴衆に問いかけている。次の発話では、*Will* という定性が節頭に出現している。これらの語彙には経験的機能はないが、聞き手に情報を要求している点で対人的機能を担っているため対人的主題に含まれる。バイデンはこのような疑問節を6回使っていたのに対して、トランプの演説には1度も使用が認められなかった。

- Will we master this rare and difficult hour? Will we meet our obligations and pass along a new and better world to our children? I believe we must and I'm sure you do as well.

### 4-3 話題的テーマ分析

次に、話題的テーマに注目し、どのような比率で人称代名詞やそれ以外の参与要素が使われているか調べた。表3は、各大統領と話題的テーマのクロス集計表である。ここに示されているテーマは文脈上省略されているものも含んでいる。また、英語では命令形の場合、動詞が節頭に出現するため、SFLではprocess（動詞）も主題に含めている。

表3 大統領と話題的テーマのクロス表

		We	I	You	3rd P	Process	計
トランプ	度数	57	3	3	77	9	149
	%	38.3%	2.0%	2.0%	51.7%	6.0%	100.0%
バイデン	度数	89	32	6	95	14	236
	%	37.7%	13.6%	2.5%	40.3%	5.9%	100.0%
計	度数	146	35	9	172	23	385
	%	37.9%	9.1%	2.3%	44.7%	6.0%	100.0%

まず両者に共通して言えることは、共に*We* (inclusive *I*) を主題として多用する傾向にあるという点である（トランプ: 38.3%、バイデン: 37.7%）。これは、内藤（2001: 39）が指摘しているように、アメリカの歴代大統領の就任演説では*We*が好んで使われる傾向にあるという調査結果と一致する。その理由として、*We*は聞き手を仲間にするすることで、話し手と聞き手との間の心理的距離を縮める働きがあり（Brown & Levinson 1987）、聞き手との間に共同意識を獲得しやすくする働きがあるためだと考えられる。しかし、次の例のように、*We*は話者と演説を聞いている全ての聴衆を意味する一方で、トランプと彼の支援者や政党チームのみを念頭に置いていると解釈することも可能であり、そこには、彼とその支持者による権力意識が感じられ、強力な政権行使を目指そうとするトランプの強い意志が、*will*を使った反復表現によって表現されている。

- We will bring back our jobs. We will bring back our borders. We will bring back our wealth. And we will bring back our dreams.
- Together, we will make America strong again. We will make America wealthy again. We will make America proud again. We will make America safe again. And, yes, together, we will make America great again.

表3の二人の演説における話題的主題の使用比率に違いがあるか検定した結果、有意な差が見られた ( $\chi^2(4)=16.2, p<.01$ )。調整済み残差を調べたところ、両者の特徴的な違いとして、トランプが1人称 *I* をそれほど使用していないのに対し、バイデンは、*I* を頻繁に使っている点が挙げられる。このことは、バイデンが聴衆に私的に語り掛けることで、聞き手との間に個人的な対話の場を構築しようとしている現れだと考えられる。そのことは、例えば次のような誓いと取れる *I pledge* や *I promise* で始まる発言にも表れている。

- If you hear me clearly, disagreement must not lead to disunion. And I pledge this to you. I will be a President for all Americans, all Americans. And I promise you I will fight for those who did not support me as for those who did.

更にバイデンは、主題以外の題述においても1人称の *I* を多用しており、所有格の *my* を含めると、全体における使用回数は70回であった。一方でトランプの *I* と *my* の使用回数は4回にとどまり、このことから、バイデンはトランプに比べて、聴衆との個人的関係をより重視した発話ストラテジーを採用していると言える。

## 5 Appraisal

### 5-1 Appraisal 理論

Halliday (1994) の Systemic Functional Linguistics を基礎に置いて発展した Appraisal 理論は、対人関係的意味を形成する談話資源のひとつである評価に関するもので、話し手や書き手の心的態度がどのようにテキストに具現されているのかを分析・記述するための理論である。Appraisal は、図4のように、ATTITUDE、ENGAGEMENT、GRADUATION の3つの相互に影響しあう領域からなる。

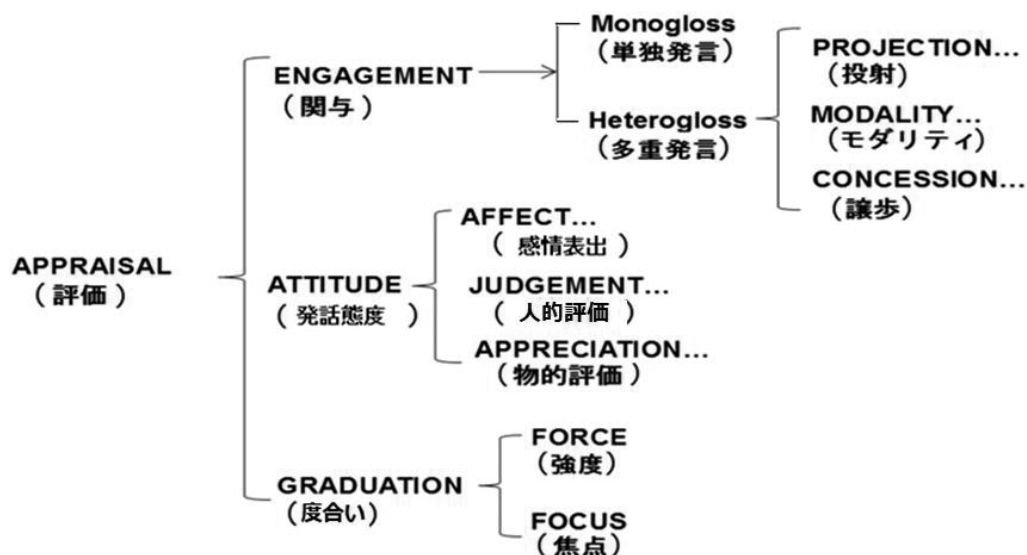


図4 Appraisal 理論のシステム (Martin & Rose 2007 に筆者加筆)



ATTITUDE は、人・物・行動などに対して、話し手や書き手が示す評価で、*affect*、*judgement*、*appreciation* の3つの感情表出に分けられ、それぞれ *positive* と *negative* の側面に分類される。これらの感情・評価表現は、それらの意味を明確に表す評価語として出現する場合 (*inscribed*) と、評価語は存在しないが文脈上から評価の意味が読み取れる場合 (*invoked*) がある。

*affect* : 人・物などに対する感情的反応を表現する言語資源。

We are one nation and their pain is our pain. (*negative*) (トランプ)

*judgement* : 人の行動や性格に関して、倫理的・道徳的評価を表現する言語資源。

We are grateful to President Obama and First Lady Michelle Obama for their gracious aid throughout this transition. They have been magnificent. (*positive*) (トランプ)

*appreciation* : 物事の機能的・美的評価を表現する言語資源。

We've learned again that democracy is precious, ... (*positive*) (バイデン)

GRADUATION は、評価の程度を調節する機能であり、*force* と *focus* に分類される。

*force* : 強調、比較級・最上級、繰り返し、様々な音声上の特徴などを通して評価内容に強弱をつけることである。一般的に表現のボリュームを上げたり (*raise*)、下げたり (*lower*) する言語資源。

One by one, the factories shuttered and left our shores, with not even a thought about the millions and millions of American workers that were left behind. (*raise*) (トランプ)

One by one, the factories shuttered and left our shores (*lower*) (トランプ)

*focus* : ある範疇において中心的なものか (*sharpen*)、周辺的なものか (*soften*) に関して、その際立ちの程度の濃淡を調整する。

He is a real policeman now. (*sharpen*) (Martin & Rose 2007)

I met a kind of policeman. (*soften*) (Martin & Rose 2007)

ENGAGEMENT システムは、話し手や書き手がある意見や価値にどう向き合っているかを示すもので、話し手や聞き手がどの程度自分の発言に他者の意見や判断を取り入れているかを取り扱う (Martin & Rose 2007: 58)。このシステムでは、発言を *monogloss* と *heterogloss* に大きく二つに分類する。

*monogloss* : 話し手や書き手が、常識的で当たり前のこととして命題を提示する場合で、反対意見や他の視点が入り込む余地のない表現。

This is your day. This is your celebration. And this, the United States of America, is your country. (トランプ)

*heterogloss* : 話し手や書き手が、自分以外の異なった視点や意見を取り入れた表現方法であり、命題内容が多くの意見の一つとして提示されたもの。*Heterogloss* の詳細については次節で取り上げる。

## 5-2 Heterogloss

図 4 に示されるように、Heterogloss は 3 つの下位カテゴリーに分類され、projection (投射)、modality (モダリティ)、concession (譲歩) を通して具現される (Martin & White 2005; Marin & Rose 2007)。Projection には、他者が発した発言を直接引用する場合と、発言内容の概要を間接的に報告する場合がある。発言を直接引用する場合、引用箇所をマークするために書き言葉では一般に引用符が付けられるが、スピーチなどでは、次の例のように、*and I quote* のような挿入句を使うこともある。

- In another January on New Year's Day in 1863, Abraham Lincoln signed the Emancipation Proclamation. When he put pen to paper the president said, and I quote, if my name ever goes down in history it'll be for this act and my whole soul is in it. (バイデン)

Projection を通して、話し手は自分以外の視点や意見を自分の発話に取り入れることで、結果的に現在の文脈で展開している自分の主張を補強することができる。次の発言は、バイデンが上の例のリンカーンの発言を引用した直後のものであるが、そこで彼は、引用文の最後の、*and my whole soul is in it* という表現を自分の発言に取り込み、自分がこれから全身全霊をかけることは、アメリカを一つに結束 ‘unite’ させることだと、monogloss として表明している。

- My whole soul is in it today, on this January day. My whole soul is in this. Bringing America together, uniting our people, uniting our nation. (バイデン)

Modality は、話し手が外的世界や内的世界との関わりにおいて、描き取られた事態・対象的な内容 (命題) に対して、話し手の立場からの捉え方、および話し手の発話・伝達的な態度の在り方である (森山他 2000)。Halliday (1994) は、modality を肯定と否定の中間に存在するものと捉え、蓋然性・通常性を表す modalization、義務性・志向性・能力を表す modulation の二つに大きく分類している。Modalization は epistemic modality (認識様態のモダリティ) に関連し、*may, might, could, must* などのモーダル助動詞が典型的なものであるが、*in my view, I think, I believe* などもコミュニケーション機能においては認識的モダリティの一種と考えられる。このような、肯定・否定の両極性の中間を意味する modality を使うことで、話し手や書き手は自分の意見や視点が数ある選択肢の中の一つにすぎないことを暗に伝えると同時に、自分の考えとは異なる他者の「声」の入る余地を対話に残し、聞き手や読み手との議論の場を保証することができる。次のバイデンの発言は、アメリカが結束することは馬鹿げた「ファンタジー」だという、反対意見の存在の可能性を認めている点で対話的であるので heterogloss である。

- I know speaking of unity can sound to some like a foolish fantasy these days. (バイデン)

Modulation は deontic modality (義務的モダリティ) と関連し、*must* 「～しなければならない」 や *should* 「～すべきだ」 などの行動制御や、*will* 「～しよう」 などの志向性も含まれる。Modulation を含む発話は、聞き手に他の選択肢の余地を全く与えない命令文とは異なり、ある程度は聞き手に別の選択肢を選ぶ余地を残している点で対話的であり、heterogloss と考えられる。一方で命令文は上記の理由から monogloss として判断できる (Martin and White 2005: 110-111)。このように、modality は、多少なりとも話者以外の声の存在を認めることで、異なる意見を持つ人々との連帯を可能にし、反対意見を持った人でも少なくとも今行われている会話の参加者として容認されることを認めるものである。

Concession は、最初の節の命題内容から喚起される想定と、それに続く命題内容との間に、「期待に反して～」 「予測に反して～」 という意味の対立関係を表す。Martin & Rose (2007: 56) は、譲歩を ‘counterexpectancy’ として捉えており、聞き手は前文に続く話の内容を予測し、話し手はそれを踏まえて対立する発言をする。つまり concession を含んだ発言は、話し手が聞き手の予測という自分以外の「声」をモニターしながら談話に取り入れている点で heterogloss であるといえる。次の二つの発話はトランプのものである。

- We will seek friendship and goodwill with the nations of the world, but we do so with the understanding that it is the right of all nations to put their own interests first. (トランプ)
- and while they celebrated in our nation's capital, there was little to celebrate for struggling families all across our land. (トランプ)

### 5-3 Engagement の分析

表4は、それぞれの演説に出現したengagementの内訳を集計したものである。集計結果をもとに、トランプとバイデンの間でengagementの使用比率に違いがあるか検定したところ、有意な違いが認められた ( $\chi^2(2) = 9.83, p < .01$ )。このことから、バイデンはトランプよりprojectionを多く使い、一方でトランプはバイデンより、concessionを多く使う傾向にあることがわかった。

表4 大統領とengagement のクロス表

	projection	modality	concession	計
トランプ	2	49	12	63
	3.2%	77.8%	19.0%	100.0%
バイデン	10	83	5	98
	10.2%	84.7%	5.1%	100.0%
計	12	132	17	161
	7.5%	82.0%	10.6%	100.0%

Projectionにおいてバイデンは、キング牧師やリンカーン大統領などの歴史的人物の発言を引用するだけでなく、*American Anthem*という曲の歌詞や、より個人的なものとして、彼が通う教会の*St Augustine*の言葉や、自分の父母の言葉を引用するなど多様である。次の例では、現在のアメリカの *uncivil war*（無意味な戦い）を終わらせるためには、彼の母親がよく言っていた、「他人の立場に立って物事を考える」ことの必要性を、比喩を使って聴衆に訴えている。

- We must end this uncivil war that pits red against blue, rural versus urban, conservative versus liberal. We can do this if we open our souls instead of hardening our hearts, if we show a little tolerance and humility, and if we're willing to stand in the other person's shoes, as my mom would say. Just for a moment, stand in their shoes.

一方、トランプの引用の使用回数は2回だけであった。尚、projectionに関して二人に共通している点として、共に聖書からの引用が存在したことを付記しておく。表5は、モダリティ中のmodalizationとmodulationの出現数を表したものである。この結果から、両大統領の間でmodalityの使用比率に違いがあるか検定した結果、有意な差は認められなかった ( $\chi^2(1) = 2.72, n.s.$ )。

表5 大統領とmodalityのクロス表

		modalization	modulation	計
トランプ	度数	23	26	49
	%	46.9%	53.1%	100.0%
バイデン	度数	27	56	83
	%	32.5%	67.5%	100.0%
計	度数	50	82	132
	%	37.9%	62.1%	100.0%

表6と表7は両大統領のmodalizationとmodulationの使用状況の内訳を示したものである。表6のmodalizationの内訳を見ると、トランプがwillに特化したモダリティ表現を採用している一方で、バイデンは、willやI thinkを中心に多様な表現を使い、情報に関する蓋然性を表現していることがわかる。また、表7のmodulationの内訳を見ても、トランプが志向性のwill (80.8%) に偏ったモダリティ表現を使用しているのに対し、バイデンは、will/ can/ must/ have to などの多様な表現を使い、義務性、志向性、能力を表現していることがわかる。

表6 modalizationの内訳

		will	can	should	may	be going to	I think +	adverb	計
トランプ	度数	21	0	1	0	1	0	0	23
	%	91.3%	0.0%	4.3%	0.0%	4.3%	0.0%	0.0%	100.0%
バイデン	度数	10	2	1	2	3	8	1	27
	%	37.0%	7.4%	3.7%	7.4%	11.1%	29.6%	3.7%	100.0%
計	度数	31	2	2	2	4	8	1	50
	%	62.0%	4.0%	4.0%	4.0%	8.0%	16.0%	2.0%	100.0%

表7 modulationの内訳

		will	can	must	have to	should	計
トランプ	度数	21	2	3	0	0	26
	%	80.8%	7.7%	11.5%	0.0%	0.0%	100.0%
バイデン	度数	20	22	8	5	1	56
	%	35.7%	39.3%	14.3%	8.9%	1.8%	100.0%
計	度数	41	24	11	5	1	82
	%	50.0%	29.3%	13.4%	6.1%	1.2%	100.0%

Appraisal 理論の engagement に関してまとめると、バイデンはトランプより projection を多く使うことで、他者の多様な意見を談話内に取り入れ、それを根拠に自分の主張に賛同してもらえるよう聞き手を説得する談話ストラテジーを好んで使い、一方、トランプはバイデンより concession を多く使うことで、他の視点や意見を一度談話内に取り込み、その予測に反する形で自分の主張の正当性を聞き手に説得する談話ストラテジーを好んで使っていると言える。一方で projection における二人の共通点として聖書からの引用が挙げられた。また modality に関しては、両者の modalization と modulation の使用比率に違いは見られなかったものの、それぞれのモダリティ内で使用されている語彙に違いが見られ、トランプに比べバイデンは多様な表現を選択していることがわかった。

## 6. まとめと今後の展望

二人の大統領就任演説における言語使用に違いが認められた点を表8にまとめた。まず語彙選択の特徴として、トランプはアメリカ第一主義の観点から *America, job, country* を多用し、バイデンは「結束」と「法と秩序」に重きを置く観点から *unity, democracy, history* を多く使っていることを確認した。

主題分析では、多重主題の分析を通して、トランプに比べバイデンは呼び掛け語をはじめとする対人的主題を多用し、聴衆との心理的距離を縮めるストラテジーをとっていることがわかった。また、バイデンに定性による対人的主題が多いのは疑問節を多用していることの表れであり、バイデンが聴衆に問い掛ける形で他者の声を談話に取り入れて、聴衆を説得しようとしていること

も確認できた。また、日常会話においてもっとも頻繁に無標の主題として機能する要素は1人称代名詞の *I* であるが、今回の話題的主题の分析を通して、演説で使用される無標の主題は *We* であることが両者に共通する点として確認できた。さらに、話題的主题に関して明らかになったことは、バイデンが *We* の次に1人称の *I* を多用して、聴衆との個人的関係性を重視した発言を選んでいるのに対して、トランプにはそのような発言はほとんど見られなかった。

Appraisal 分析に関しては、今回 engagement に焦点を当てて分析したが、その結果、projection ではバイデンの方が多様な引用を積極的に活用することで、他者の声を対話の場に取り入れ、自分の主張を展開するストラテジーを多く採用していた。Modality においては、両者の間に modalization と modulation の使用頻度に違いは認められなかったものの、各カテゴリーに使われている語彙に関しては、トランプが *will* を好んで使用しているのに対して、バイデンの選択肢は多様であった。また、concession に関しては、トランプが多用しているのに対して、バイデンは使用が少なかった。

表 8 トランプとバイデンの比較一覧

		トランプ	バイデン	
語彙分析	特徴語	America, job, country	unity, democracy, history	
主題分析	テキスト形成的主題	同じ	同じ	
	対人的主題	少ない	多い	
	話題的主题	<i>We</i>	多い	多い
		<i>I</i>	少ない	多い
Appraisal 分析 (Engagement)	Projection	少ない	多い	
	Modality	種類が少ない	種類が多い	
	Concession	多い	少ない	

今回の談話分析をまとめると、トランプは、明確な発音で、だれにでもわかるような簡潔な表現を使うと同時に、*We will* といった力強い意志表明の表現や concession を使いながら聞き手を説得する演説スタイルを取り、一方バイデンは、個人的な発話スタイルを好んで使うと同時に、多様な方法で他の視点を自分の発言に取り込み、聴衆を対話の場に参加させながら説得する演説スタイルを取っているといえる。

学生にスピーチを指導する際は、個人的な経験や意見をただ述べるだけでなく、また聞き手に合わせて話を作るのでもなく、異なった意見や視点を対話空間に適切に組み込み、全体をバランスよく管理できる言語能力を身に付けさせることが、説得力のあるスピーチにとって重要である。本研究は、トランプとバイデン両氏の就任演説の言語的特徴に絞って分析したが、アメリカの歴代大統領の演説と比べてどうであったかは不明なままである。今後は他の大統領の就任演説も分析対象に加えながら、スピーチ教育に役立てられる普遍的な傾向や有効な技法を探って行きたい。

## 注

- (1) 共和党トランプ大統領の就任演説は、<https://www.bbc.com/news/world-us-canada-38697653>より引用した。
- (2) 民主党バイデン大統領の就任演説は、<https://www.bbc.com/news/world-us-canada-55656824>より引用した。

## 参考文献

- 会田弘継 (2020) 「アメリカ保守思想の変容と「小さな政府」の終焉」 『中央公論』 vol. 9, 142-149, 中央公論新社.
- Brown, Penelope. and Stephen C. Levinson (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. New York: Cambridge University Press.
- Eggins, Suzanne. (1994) *An introduction to Systemic Functional Grammar*, London and New York: Continuum
- Halliday, M.A.K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar*, 2nd ed. Edward Arnold.
- Harvard Business Review (2002) 『コミュニケーション戦略スキル』ダイヤモンド社.
- 石角完爾 (2000) 『アメリカのスーパーエリート教育』 ジャパンタイムズ.
- 加藤昌男 (2001) 「スピーチ・セミナーにみる先生たちの表現力」 『日本語学』 vol.20, 56-65, 明治書院.
- Martin, Jim. and David Rose (2007) *Working with Discourse*, (2nd ed), London: Continuum.
- Martin, J. R. and P. R. R. White (2005) *The Language of Evaluation: Appraisal in English*, New York: Palgrave Macmillan.
- メーナード・K・泉子 (2004) 『談話言語学』 くろしお出版.
- 三牧聖子 (2020) 「民主党は労働者の党になれるか？」 『中央公論』 vol. 11, 111-118, 中央公論新社.
- 森山卓郎・仁田義雄・工藤浩 (2000) 『モダリティー』 (日本語の文法 3) 岩波書店.
- 内藤誼人 (2001) 『絶対相手に Yes と言わせる心理作戦』 オーエス出版.
- 中村敦雄 (2001) 「戦後国語科教育における「スピーチの教育」の史的展開」 『日本語学』 vol. 20, 66-78, 明治書院.
- 中右 実 (1999) 「モダリティーをどう捉えるか」 『言語』 vol.28, 26-33, 大修館書店.
- 佐々木泰子 (2001) 「再生産される「スピーチ」」 『日本語学』 vol.20, 48-55, 明治書院.
- 龍城正明 (2005) 「ことばを伝える」 龍城正明(編) 『ことばは生きている－選択体系機能言語学序説』 89-92, くろしお出版.
- 土岐 哲 (2001) 「日本語のスピーチ教育」 『日本語学』 vol. 20, 6-10, 明治書院.
- ウィリアムズ・ジェフ (2002) 『英語教師のための機能文法入門』 リーベル出版.
- 宇佐美 洋 (2001) 「これからのスピーチ研究」 『日本語研究』 vol.20, 37-47, 明治書院.